

# 北京で語られるアメリカ像

——宗璞の一九四九年、イー・ユン・リーの一九八九年—— 濱田麻矢



## はじめに——解放軍の二度の北京入城

一九四九年一月三十一日、中国人民解放軍は西直門から北平（北京）城内に無血入城を果たした。同年一〇月一日に、毛沢東は天安門に登って中華人民共和国の成立を宣言している。

それから四〇年経った一九八九年五月一九日、民主化を求めて天安門広場を占拠していた学生たちに対して鄧小平は戒厳令を布告した。六月三日深夜、人民解放軍はやはり西から市街に入り、翌朝には戦車で全市を鎮圧する。

一九四九年と一九八九年、二回の人民解放軍の北京入城は全く種類の異なる記憶となった。前者は輝かしい歴史と

して繰り返し語られ、後者は触れてはいけない傷として、主に国外で語られる物語になったのである。

本論は、この二つの年を回顧する小説をいくつかとりあげる。中心になるのは宗璞（一九二八—）「紅豆」（一九五七年<sup>①</sup>）とイー・ユン・リー（一九七二—）「市場の愛」（二〇〇五年<sup>②</sup>）の二編である。どちらも(1)北京のキャンパスを舞台にし、(2)二人の女性と一人の男性の人間関係を描き、(3)米国へ「行かなかった」ヒロインの回顧を描くものだ。「事件」そのものと同じ時間軸に立つのではなく、過去のものとなった「事件」をどのような角度で書くのか、学生生活における社会的事件と個人的恋愛はどのように処理されるのか、そして米国及び英語文化圏がどのようにイメーヂされているのか、他のいくつかの小説も参考にしながら

考えてみたい。

## 一 「紅豆」——建国前夜の北京にて

「紅豆」は『人民文学』一九五七年第七期に発表された。この短編についてはすでに論じたことがあるが、もう一度あらすじをまとめておく。

一九五六年、主人公江玫は共産党幹部として、六年前に卒業した母校に帰ってくる。昔馴染みの校務員が案内してくれた宿舎は、偶然にも彼女が学生時代に住んでいた同じ建物の同じ部屋だった。昔のままの部屋を見渡した彼女は、壁にはめ込まれた十字架を見つめる。江玫はこの十字架の裏に、当時の恋人からの贈り物を隠しておいたのだ。探してみると、はたして紅豆（相思豆）をあしらった指輪が、納められた時のままつややかな光を放って現れた。この指輪から、八年前の記憶が蘇る。

「小鳥児」という愛称そのままに天真爛漫で無垢だった江玫は、ある雪の日に、大学のピアノ練習室で物理学専攻の青年、斉虹に出会う。文学、芸術の趣味を通じて瞬く間に恋に落ちた二人だが、江玫はいつも彼の傲岸さや社会への無関心さが気になっていた。江玫の同室は同じく物理学専攻の蕭素で、学生運動の先鋒に立って活動する勇敢な先輩であった。江玫の姉のようにふるまう蕭素は、江玫を積

極的に共産主義運動へ導こうとする一方で、銀行家の息子でブルジョワ青年の典型である斉虹を軽蔑していた。江玫の学生生活は、斉虹への「資産階級的な愛情」と蕭素への「政治的に正しい友情」の二層に引き裂かれてゆく。江玫の最愛の母は控えめながら蕭素及び共産党へ信頼を寄せ、娘の恋人に疑念の眼差しを投げかける。物語が進むうち、江玫の父の死には国民党が関わっていたことがわかり、江玫自身も新中国成立のために自分を擲つことを決意する。恋人が自分の思い通りにならないことに激昂した斉虹は、威嚇と懇願の二極を往復して江玫を困惑させる。喧嘩の末、彼は自分が割った江玫の髪飾りを拾い上げ、そこにあしらわれていた紅豆を指輪に仕立てて「二度と喧嘩しないように」と彼女に贈るのだった。二人の関係は膠着したままだったが、時局のほうは急展開をむかえ、共産党の活動分子だった蕭素は国民党政府に逮捕されてしまう。斉虹と江玫が出会って一年たった一九四八年の冬、せまりくる解放軍の入城の前に、斉虹は米国行きの航空券を示し、江玫に自分と一緒に渡米するよう強く迫る。憔悴しきった彼の様子に心揺さぶられながらも、江玫は母国と共産党を選ぶと答え、「私は後悔しない」と言い切ったのだった。

宿舎に隠してあった紅豆の指輪を手に、江玫は以上の回想に耽るのだが、斉虹を思って流した涙はすぐに乾く。「彼女は本当に後悔しなかった」と語り手は告げ、党の傑

出した工作者として成長し、母校に凱旋した江玫を祝福して小説は終わる。

## 二 米国へ去る恋人

一九五七年、まだ建国の情熱が冷めやらぬ北京で発表されたこの小説において、「母国の革命運動への献身」というヒロインの選択が帰結となるのは当然のことだ。しかし江玫の回想では、彼女が「党のすぐれた工作者」となるまでの建国後の成長については何も語られはしない。物語の枠組みにあたる五〇年代の部分は小説全体の十分の一ほどで、これは曲終奏雅のための縁取りとも言えよう。小説の核心の部分は、一九四七年の冬に始まる激動の一年にある。それは、建国後の安全な場所からあらためて建国前夜の危機を語り直すという作業でもあった。ここでいう「危機」とは国家の有為たる人材となるべき江玫が、資産階級の息子によって足を踏み外したかもしれないということなのだ。揺れ動く彼女の最大にして最後の危機、斉虹に米国に同行するよう懇願された場面を読んでみよう。

「明日朝早い飛行機なんだ、今晚もう空港へ行かなくちゃ」斉虹は忙しげに言った。「もう全部手配済みだよ、どうするの？ 僕たちはこれで別れなくちゃいけないの？」

いの？」

「別れる？——二度とあなたに会えなくなるの？——」江玫はイエスの受難像を見た。まるでその裏に隠した二つの紅豆まで見えるような気がした。

「全く別れる必要なんてないんだ、永遠に一緒にいられるんだよ、玫！ ただ君が一言、僕と一緒に行くと言ってくれさえすれば、僕の可愛い人！」

「だめだわ」（略）

「ほんとうにだめなのかい？ 君が今やっていることは、死にかけている人間を見ながら手を差し伸べないようなものだよ。でも彼は死んでしまったらもう二度と生き返らないんだ。もう二度と生き返らないんだよ！ 行ってしまった人間はもう二度と帰ってこない。君は後悔するよ、玫！ 僕の玫！」彼は力を込めて江玫の肩を揺さぶった。

「私は後悔しない」（略）

江玫は何か言おうとしたが言葉にならなかった。何千本ものナイフが喉に刺さったようでもあった。彼女は心に念じた、「あと一分持ちこたえなくては、なにがあってもあと一分」

斉虹の氷のように冷たい唇が額に触れるのを感じたかと思うと、車が動き出した。周囲は見渡す限り白かった。天地を駆けめぐる白、全てをうめつくす白——

彼女が最後に斉虹にいった一言は「私は後悔しない」であつた。

ここで回想は終わり、「後悔しなかつた」玫の涙がすぐに乾いて、彼女の凱旋を歓迎しに来た「同志」たちを迎え入れようとするとところで小説は終わる。しかし読む者に強い余韻を与えるのは、「党のすぐれた工作者」としての江玫の成長ではなく、国家興亡の間に、降りしきる雪の中で永遠の別れを告げた一对の恋人の姿であるにちがいない。回顧のまなざしは「愛情」と「革命」の選択一点に注がれており、恋人と別れた後の江玫についてはほんの敷衍で片付けられているのである。斉虹という人物が魅力的に造型されていることで、江玫の選択はより困難でより気高いものになつたと言えるが、それについては以前論じたことがあるのでここでは繰り返さない。ここでは少し遡つて、「アメリカに行こう」という言葉がもつていた衝撃について考えてみたい。蕭素が逮捕されたことに對して冷淡な斉虹に、江玫が怒りを爆発させた場面を読んでみよう。

「また僕は君を怒らせたのかい？ 玫！僕は蕭素に嫉妬しただけなんだ、君があまり彼女のことばかり考えているから。君は僕のことをどう思っているんだい？僕はどうも彼女が憎いよ、彼女のせいで僕たちはうまく

いなくなつたようだから——」

「彼女のせいじゃないわ、私たちの進む道が違ふのよ」江玫はすすり泣きながら言つた。

「なんだって？ どうして違ふの？ そりや僕たちの考え方は少し違ふし、よく喧嘩もする。僕はたしかに癩癩持ちだよ。でもそんなことどうでもいいんだ、とにかく僕には、君がいなきやだめなんだ。それだけはよくわかつてる。まだ言つてなかつたね、玫、僕の家はね、時勢の変化をみて米国に移住しようとしてるんだ。僕もアメリカに留学することになるよ」

「あなたが？ アメリカに？」玫はさつと座り直した。  
「そうさ、君もいくんだよ、玫」

「紅豆」の舞台は作者の母校である清華大学であり、宗璞の父、哲学者の馮友蘭（一八九五—一九九〇）は清華大学の看板教授の一人であつた。馮友蘭は一九二〇年代、宗璞が生まれる以前にロンビア大学に留学してデュイイに師事しており、また抗日戦勝利後の一九四六年にはペンシルベニア大学で教鞭をとつている。国共内戦が深刻化するにつれ、中米が断交するのではないかと恐れて四七年に帰国したのであつた。宗璞は米国に同行したわけではないが、抗日戦期には清華大学を含む西南聯合大学の付属中学校に学び、戦後は南開大学を経て清華大学の外文系に転入

している。

そもそも庚子賠款によって創建された遊美学務處を前身とする清華大学は米国との交流が盛んであり、西南聯合大学時代（一九三八—一九四五）も、教授たちはできるだけアメリカやイギリスの教科書を用いるのを好んだ。聯合大学は北京大学、清華大学、南開大学からなったが、合わせて一七九人いた正副教授陣のうち、一五六人までが留学経験を持っており、多くはアメリカで学位を取得していたという。彼らの講義にはふんだんに英語が使われ、学生たちは二カ国語でノートを取ることを覚えねばならなかった。<sup>⑤</sup>

「紅豆」の舞台は一九四五年に日本が敗戦し、聯合大学が解散してそれぞれの大学に凱旋したわずか三年後のことで、こうした英語圏文化の影響は色濃く残っていたはずだ。文中にはシエイクスピアやブロンテ姉妹について江玫と齊虹が話し込む場面も盛り込まれている。外文系に在籍していた宗璞にとって、英語圏の文学世界は非常に近いものだったはずだ。<sup>⑥</sup>「アメリカに行こう」という言葉は、宗璞にとっても江玫にとってもリアリティがあったと思われる。

一九四八年一月二三日、おそらく齊虹と江玫が永遠に別れを告げてから間もなく、人民解放軍は清華大学の門まで至り、北京城内へ進軍する準備を始めた。その前日、一七年間にわたって清華大学の学長を務めた梅贻琦は大学を

離れて北京城内に移った。そして二月二日、何人かの知識人と共に国民党の用意した特別機でアメリカへ向かい、永遠に大陸を去ったのである。「行ってしまった人間はもう二度と帰ってこない。君は後悔するよ!」という齊虹の言葉はこうした背景を持っていた。

### 三 愛よりも強い信念

江玫の選択に戻ろう。前掲の場面で、ブルジョワ青年齊虹は、何くれとなく江玫を導き励ます革命派の蕭素に「嫉妬している」と告白している。二人の間に引き裂かれる江玫は、シエイクスピアやショパン、蘇東坡や李商隱など、「ブルジョワ的な」芸術テクストを齊虹と共有すると同時に、蕭素によって喬冠華や艾青、田間といった「革命的な」テクストに接近していった。前者に属する芸術世界を（そして芸術を解する齊虹を）心から愛しながらも、革命の正しさに開眼した江玫は最終的に愛情（とそれに伴う芸術的世界）を放棄する。

この「政治的に」正しく生きるために愛情を放棄する「ヒロインの姿はこの時代の産物と言えるだろう。振り返れば一九一五年の新文化運動以降、自由恋愛を尊ぶ思潮と共にロマンチック・ラブ・イデオロギー（ここでは愛と性と結婚を三位一体とし、一対一の排他的な異性愛を尊ぶ考え

方、と定義しておく）がなだれ込み、特に女性は「愛情を尊ぶ性」とされてきた。宗璞の叔母、馮友蘭の妹にあたる馮沅君の小説「旅行」（一九二三年）はその流れを代表するものと言えるだろう。新文学の中では家父長の命ではなく、自分の意志によつて愛する対象を決めることがいかに崇高な行為であるかが強く訴えられたのだった。その命題は、民国期を通じて、特に女性文学の中心に位置していたように思われる。そして「女Ⅱ愛情を尊ぶ性」という図式は、やがて陳腐化して賞賛よりも揶揄を浴びるようになっていった。張愛玲（一九二〇—一九九五）が「花凋」で書いたように、未婚の女たちはすべからず「女結婚員」と考えられるようになってしまったのである。

こうした図式が揺らぎ、女性、特に未婚の若い女性たちにとつて、「愛」よりも優位にある価値観がありうるのだとはつきりと肯定されたのは、抗戦期の共産党根拠地文学に始まるのではないだろうか。ここでは丁玲（一九〇四—一九八六）の「霞村にいた頃」（一九四二年）を例に挙げよう。ヒロインの貞貞は日本軍に連れ去られて慰安婦になり、病氣（おそらく梅毒）を患つて故郷の村に帰つてくる。村中から軽蔑されている貞貞に、以前は相思相愛だった夏大宝が求婚をするが、村中が驚いたことに、貞貞は彼を拒絶する。彼女は、小さな村で軽蔑され、同情されつつ大宝に庇護されるのではなく、延安で新しい知識を学ぶこ

とを選んだのだ。愛していたはずの男性ではなく、独立の道を目指して共産党根拠地をめざすことを選んだ貞貞を周囲は非難し、彼女と友情を育んできた語り手の知識人女性「わたし」すらも軽い失望を覚える。しかし最後に、自分の決定について「みんなに分かつてもらわなくてもいいことだってある」（有些事也並不必要別人知道）と言う貞貞に「わたし」はほとんど圧倒される。

「わたしは彼女の明るい未来を見たような気がした。明日はまた彼女に会えるだろう、きつとまた会えるだろう、そしてまた、これからしばらくの間、わたしたちはいつも一緒の日を過ごすだろう」

昔の恋人との結婚ではなく、延安で一人で学び直すことを決めた貞貞に、「わたし」は自分が彼女と延安で一緒に過ごせるだろうという期待を寄せる。興味深いのは、新文化運動以降、魯迅の「傷逝」（一九二五年）をはじめとして「啓蒙し導く男性」と「彼から学び、開花する女性」という一対がしばしば描かれてきたのに対し、「霞村」で「お互いになくってはならない存在」となり、語りあい高め合うのは女性同士であることだ。そしてこの構図——真剣に愛していた男性からの求婚を拒絶し、女友達と新しい世界へ邁進してゆくというヒロインの選択——は、「紅豆」に共通すると言える。逆に言うならば、女性がロマンチック・ラブ・イデオロギーから解放されるためには、より強



力ないデオロギー（この場合は共産主義革命）が必要だったということになるだろう。

ここで参考のために、四九年に新中国建設を選ばなかった作家、潘人木（一九一九―二〇〇五）の『漣漪表妹』（一九五二年）におけるヒロインの選択に触れておこう。

潘人木は遼寧に生まれ、満州事変後北平に移って抗戦中は重慶の中央大学で学んだ。一九四九年に渡台している。

「抗戦四大小説」の一つと言われた『漣漪表妹』は二部からなる。第一部の舞台は日中戦争勃発前夜の北京で、物語は漣漪のいとこ碧琴の一人称で語られる。満洲国となった故郷から逃れてきた碧琴と漣漪は、東北出身の学生を無料で受け入れる大学に入学し、さまざまな政治運動を体験する。漣漪は愛くるしい容姿に恵まれているものの、嘘つきで見栄っ張り、常に誰よりも目立ちたい、特に「校花」と言われる沈積露の優位に立ちたいと考えている女の子である。彼女はすでに親が決めた婚約者がいることをひた隠しに隠し、最終的には強引にこの婚約を解消するが、心を寄せていた青年趙白安がライバル積露と一緒にいる場面に絶望し、妻子ある共産党の青年洪若愚と一夜の関係を結ぶ。妊娠してしまった彼女は、北京陥落を前に避難しようとしている碧琴一家の前から姿を消してしまった。第二部は、戦後台湾で暮らしている碧琴に届けられた漣漪の手記という体裁を取る。洪若愚の情婦に身を落とした漣漪は、

延安で辛酸を嘗め尽くし、やはり地下黨員であった積露に散々貶められた後、北京を経て香港に逃げたのであった。

延安及び共産党、新中国の持つ意味が「紅豆」や「霞村」と全く異なるのは当然のこととして、ここでは漣漪の選択——亡父の決めた婚約を拒絶し、愛していたわけでもない青年と関係を持つ——に注目したい。前者における少女の選択が、「より強い信念のために愛情を放棄する」という枠組みだったのに対し、漣漪の物語には明らかに懲罰的要素が見られる。語り手碧琴は、漣漪の婚約者曹瑞が鷹揚かつ誠実で、父母に決められた婚約とはいえ漣漪のことを本当に気にかけて大切にしていたことを繰り返し強調する。この物語では、新文化運動以降打ち捨てられてきた家長による縁組が称揚されると同時に、漣漪が（家父長の言うことを聞かずに）「自分の人生を自分で決めてしまったこと」によって懲罰を受けるのだ。「紅豆」と同じく動乱のキャンパスを描いた作品であるが、ここでは「少女が自分で自分の運命を決める」という五四以来の命題に疑問が突きつけられている。

『漣漪表妹』が一九八五年に再版された際、作者は「私は訴える」（我控訴）というタイトルの自序を新たに書き下ろし、自分が台湾に渡ったことで大陸に残された家族があるいは殺され、あるいは迫害されたことについて激しい非難を加えている。この悲報は一九八〇年によく大陸

からもたらされた手紙によって明らかに became ということだが、小説執筆の段階で、作者にはすでに「両親を見捨てた」という罪悪感があったにちがいない。その訴えはまた、「共産主義は親子の情という人倫を踏みこじる」という反共小説の多くに共通するモチーフにつながっているのだらう。

しかし、この小説で描かれた漣漪の選択が惨めなのは、「反共小説」という枠組みのせいではない。洪若愚は漣漪が白安（共産党に疑念を持つ青年）に好意を寄せていたこと、彼に失恋したことを知っていて、自暴自棄になった彼女に付け入り、関係を持ったのである。「彼は私の全てをはっきり知っていて、百パーセントの自信を持って私に手を下したのだ」<sup>8</sup>。洪が共産党地下黨員で白安は愛国主義者、おそらく理想的な夫になったであろう曹瑞の優しさを拒否し、自分のロマンチック・ラブ・イデオロギーに振り回された挙句に「一文の価値もない腐った魚」になってしまったのだ。白安への憧れにせよ、洪に衝動的に身を預けてしまったことにせよ、漣漪の悲劇は、彼女が愛（極めて幼稚でぼんやりした概念としての）以外に何の信念も持ち合わせていなかったことによるものだ。「傷逝」の子君は恋人消生以外に世間と接触するチャンネルを持っていなかったために、彼に捨てられるとまもなく帰郷して死んでし

まった。張愛玲「沉香屑 第一炉香」のヒロイン薇龍は、ごろつきのジョージ・喬が自分を愛していないと知りながら彼に全てを捧げ、破滅への道を辿る。漣漪の悲劇はこれらのヒロインの系譜——目の前の愛情以外に自分を投じるべき信念を見つけれない少女——につながるものだと考えよう。それに対して、同じ五〇年代に書かれた「紅豆」の江玫は、「愛よりも強い信念」を見つけた、新中国にふさわしいヒロインとして造型された。物語の大部分を構成する回顧の部分では、文学と音楽という媒体（よりブルジョワ的な）を通して斉虹と精神的に惹かれ合う過程が丁寧に描かれているために、彼女が国を選ぶ時の辛さと重さにリアリティが与えられ、なおかつ愛を犠牲にしても選ぶべき国の存在が際立つようになったのである。一九五七年、反右派闘争直前に書かれたこの小説は、少女が愛情のために真剣に悩むという、民国期の枠組みを残した最後の恋愛小説と言えるかもしれない。そして一九五七年という時代は、いかに英語文学に慣れ親しんできたヒロインであろうとも、愛する青年と手を取り合ってアメリカに行く、という結末を想像することすら許さなかった。では、この「愛より強い信念」が弱体化したとき、少女の選択はどのように変化するのだろうか。



## 四 「市場の愛」

### ——六四以降のアメリカンドリーム

イー・ユン・リー（李翊雲）という作家は、日本の中国文学研究ではまだあまり語られていないようである。彼女は一九七二年に北京に生まれた。父は核開発の研究者、母は学校の教師。高校生として一九八九年六月の解放軍北京入城を迎えた時は、決して外に出ないように両親によって家に閉じ込められていたという。一九九一年、北京大学入学。天安門事件の記憶が生々しかった当時、北京大学の新生入生に課せられていた軍事訓練を経て細胞生物学を学んだ。大学卒業後の一九九六年に渡米、アイオワ大学で免疫学を学ぶと同時に創作講座を受講、英文作家イー・ユン・リーとしてデビューを果たした。ここで取り上げる「市場の愛」は、二〇〇五年に出版された彼女の最初の作品集『千年の祈り』に収録されたものである。この『千年の祈り』は第一回フランク・オコナー国際短編賞（ちなみに翌年の受賞者は村上春樹）など、計五つの賞に輝いている。現在短編集が二冊に長編が二冊発表されており、ハ・ジンに並んで、もっとも成功した華人英文作家と言えるだろう。

以下、まずは「市場の愛」のあらすじを掲げる。  
中国の田舎町で英語教師をしている三三二歳の三三には夫

も恋人も親しい友達もない。彼女はいつも中国語字幕なしの『カサブランカ』を生徒に見せているのでミス・カサブランカというあだ名をつけられている。この町で北京の重点大学に進学したのは三三と幼なじみの土の二人だけで、故郷に戻ってきたのは三三のみであった。

十年前の一九八九年、天安門で民主化運動がわき起こっていたとき、その熱狂に参加しなかった三三と土は、がらんとしたキャンパスで結婚を約束する。それは故郷の肉親たちが待ち望んでいたことでもあった。やがて運動は挫折し、多くの学生が失意のうちに大学へ戻ってきた。その中に「三三が出会ったなかで最も美しい女の子」旻がいた。都会的で華やかで、以前は三三など近寄ることもできなかった彼女が、天安門広場でも偶像としてふるまいマスコミに露出していたのだが、それが仇となり、当局に眼をつけられたまま救いのない未来に向かい合っていた。どん底の彼女に近づき、友達になった三三は、どんなことをしても彼女を救いたいと思うようになる。アメリカに親戚がいれば渡米ビザが降りるといふ情報を聞いた三三は、アメリカに大叔父がいる（本当は台湾に行っただけだが）自分の恋人、土を利用し、土と旻を偽装結婚させて米国へ送り出す。数年たって旻が米国で独り立ちできたら、二人はすぐに離婚、土はもともとの予定通り三三と結婚するというのが三人が内密に交わした約束だった。

しかし、その約束はほどなく破られる。「晏と本当に結婚した」という短い手紙を受け取った後、三三は中毒のようになり瓜子を食べながら（あとでその瓜子には麻葉が入っていたことがわかるのだが）土と晏との性行為を想像し、時には晏と自分を取り替えて自慰にふけるようになる。その繰り返しの日々には転機が訪れたのは、市場で茶葉蛋を売る三三の母の訪問だった。渡米後十年にして晏と土が離婚したのだ。すぐに土と結婚するように、という母の言葉に、三三は「そんな愛はいらない」「そんな結婚はしたくない」と繰り返すしかない。市場で会話するうち、三三は母親が（そしてこの町の人全員が）彼女が土と肉体関係を持ったあげく捨てられた、と知っていることを知る。事故死だったと思っていた父も、彼女の不行跡に心を痛めて自殺同然に亡くなったのだと思ったり、愕然とする三三。

その三三が実は処女であることを知って、母親は「なお都合がいい」と喜ぶ。

そこへ突如、みずぼらしい風貌の男が現れる。彼は市場の公衆の面前でナイフで自分を切りつけたかと思うと、その血で「一〇元で自分の好きなのところを切ってくれ。命を落としても文句は言わない」と書きつけてみせた。居合わせた人々は好奇心を持って近寄るものの、「気違い」もしくは「新手の乞食」としか思わない。三三の母親は一〇元を「施す」が、男は静かに拒否し、「自分を切らないなら

一〇元は受け取れない」という。三三はその一〇元札をあらためて男に渡し、男からナイフを受け取って彼の身体を検分し、ようやくみつけた「約束」に満足して、やさしく愛をこめて男を切り開く。

天安門事件を遠景として書かれたこの短編は、五〇年近く前に北京で書かれた「紅豆」と位相的に興味深い一致を見せている。その共通点をもう一度あげるなら、(1)政治の季節に揺れる北京の大学を背景とし、(2)米国に渡る恋人を見送って、(3)中国に残った女性が当時を回顧する物語、ということになる。

時代はもちろん、作者の立場も書かれた言語も異なるのだから、「枠組みが似ている」というだけでは議論にはならない。しかし、北京における政治的動乱の向こうに見える米国イメージについては検討する価値があるのではないだろうか。本論では、米国におけるリー受容の一端を紹介したのちに本作のモチーフである「皿」と「約束」に触れてから、九〇年代の渡米イメージについて考えてみたい。

## 五 皿と約束

英語圏でのレビューは、総じてリーについて人生における不条理を扱う稀有な才能を持つとする。ある論者は、

「市場の愛」の「物語は驚くべきエロチックな迂回を経て、自尊心の不可解さを切り開いていく」といい、別の論者は土の唯一の恋人になることに賭けていた三三にとつて、十年後のプロポーズは意味をなさず、その誓いが最後の血のシーンをより戦慄すべきものにしていくという。たしかに、文中で何度も繰り返される「約束」という言葉と物語の最後に噴き出す血はこの小説を読み解く鍵になるだろう。

市場で母親に執拗に（しかし遠回しに）土との（性的）関係について尋ねられた三三は、母及び町の人々が「シートの上に処女の証拠を残せなくなった」自分を腫れ物のように扱っていたのだ、と気づく。故郷の小さな町に住む人々は、土に捨てられた三三はすでに処女ではないので結婚することができないのだと考え、彼女を憐れんだり蔑んだりしていたのだ。この「純潔」でなくなった未婚の女への視線」は、前出の「霞村にいた頃」の村人と同類のものと考えられるだろう。そのように見られている、とは土の離婚の知らせまで気づいていなかった三三だが、母との会話の中で「自分の処女性」が一人歩きしていたことを思い知らされる。

三三はこの時初めて、町の人々が彼女に寛容だった理由を理解した。恋人に食い物にされてから捨てられた気の毒な女。初夜の床で、白いシートに処女のしるしを残

せないために結婚できない女。（傍点は筆者による。以下指示のない場合は同じ）

後述するように、三三は毎日のように土と旻が愛し合う行為を妄想し、時には自慰に耽っていたのだが、母は、ともかく娘が「彼のために純潔を守っていた」（傍点は原文ではイタリック）ものと考ええる。自分が処女であることは偶然の結果であつて、「土のために守ってきたもの」などではないと三三は説明したいのだが、母にその論理は通用しない。そこに現れたのが見知らぬ男である。「自分の体を切れ」という指示に、市場の中で彼女だけが反応する。

彼女は彼のむき出しになった日焼けした肌と静かに血を流している傷を念入りに眺める。彼女の指は彼の上腕をじっくり確かめながら肩に移動する。男は彼女が肉体をなぞるたび、かすかに体を震わせる。（略）

男の筋肉は彼女の指先の愛撫によつて緩む。これだけの年月をかけて、彼女はやっと、何が約束かを知る人に会えたのだ。（略）

「お母さん、心配しないで」三三はいい、母に笑顔を見せる。そしてナイフを男の肩に当て、ゆっくりと、愛と優しさを込めて彼の肉を切り開く。

処女の証拠を失っていない、血を流していない三三が、静かに血を流している市場の男に近づき、彼の肉体を検分して「愛をこめて」「切り開く」。畳み掛けるような現在形の繰り返して書かれたラストは、この「血」が現実のものであることを強調しているようだ。三三の握ったナイフは性器の代わりとなつて約束を守り、静かに震える男の肉体を割く。ここでエクスタシーは頂点に達し、血は流され、約束は成就し、愛が発見されるのだ。肉を切り開かれることを欲する「男」は、抑圧されてきた三三の欲望が呼び出したものと考えて差し支えないだろう。土と違つて「約束」を守ろうとする男に出会つたことで、三三は「欲望されない処女」であることをやめて、「欲望し、肉を切り開く主体」となつたのだつた。一見唐突なこの結末まで至つた時、私たちは婚約者と友人のセックスシーンを繰り返して妄想していた三三の欲望が、土へ向けられていたものではなかつた可能性にあらためて気づくことになる。

旻の絹のような長い髪がセロリの茎のような土の体を撫で、彼をじらし、彼を誘う。土はカリフラワーのような大きな頭を旻の豊かな胸に押し当てる。乳を探す、腹を空かせた醜い子豚のように。想像を巡らせれば巡らせるほど、彼らは馬鹿げた姿になつてゆく。土をこんなふうに戯画化するのには公平ではないと、三三にはわかつて

いた。しかし旻の美しさはダイヤモンドのように穿つことのできない(impenetrable)ものだったのだ。

旻の impenetrable な美しさとは、土という名前の通り土臭い男には「貫けない」という性的な含意が込められているだろう。旻は「三三が大学で出会つた中でもっとも美しく、十年経つた今でも、彼女の印象の中で一番美しい」少女だつた。奇妙なことに、三三の記憶の中で、土の言葉は再現されているものの、旻の言葉は一言も出てこない。生身の肉体描写も三三の妄想の中に登場するだけだ。その旻は美しさの象徴として三三の心を占領する。天安門事件以降、派手にマスコミに露出していた旻に近づいたのは全く運動に参加していなかつた三三だけだつたが、旻が友達になつてくれたことで、三三は「喜びと感謝で有頂天になる」と同時に、「旻の不運につけこんだようで少し後ろめたい」ような気にさえなつているのである。対して土との愛については、ストライキが始まつて教師も授業をするのをやめてしまうと、「彼らは親しくなり、両親を含む故郷の人々が期待していた通り恋に落ちた」という一行であつさり片付けられているのは注目に値するだろう。

物語の時間軸に戻つて整理するところになる。北京中を揺るがした天安門事件に参加しなかつた数少ない学生である土と三三は「期待された通り」恋に落ちた。し

かしこの事件が挫折したとき、三三は「思いがけず」美しい旻と友情を育むことができた。旻を窮地から救いたいあまり、三三は恋人と彼女を偽装結婚させる。そして信じていた二人に裏切られた彼女は、彼らの性行為を想像しながら、ますます旻を美しく、土を醜く戯画化してゆくのだ。

三三のこの心理と結末での「切り裂かれる肉」を併せて考えるならば、三三が離婚後の土と結婚することを受け入れられなかった理由は、破られた約束だけにあるのではなく、彼女が奪っていったのは、土ではなくむしろ旻ではなかったか。彼女の旻への欲望が、ナイフを持った「男」を呼び出し、そして「彼の肉を切り開く」という「愛の行為」へ転化したと言えないだろうか。

## 六 米国と脱出口

話を米国イメージに戻そう。教育史の研究によると、八〇年代以降、中国のアメリカ留学熱は高まる一方であった。一世を風靡したテレビドラマ『ニューヨークの北京人』（北京人在紐約）が放映されたのは一九九三年、自伝小説『マンハッタンの中国女性』（曼哈頓的中国女人）が注目を浴びたのも同じ年である。

一九八九年に天安門事件が起こる前からすでに、八〇年代の中国で繰り返された政治キャンペーン（一九八一年の

白樺『苦恋』批判、八三年の「精神汚染」批判、八六年の方励之批判など）は在米の留学生に文化大革命が再来するのではという不安を与えていた。そして事件後の九〇年、ジョージ・ブッシュが大統領令を発し、九〇年四月一〇日以前に米国にいた中国人留学生は、資格の有無を問わず九四年一月一日まで米国滞在を認める、としたことも大きな影響を及ぼした。一九九三年七月一日、クリントン大統領が「中国人留学生はもう母国へ帰っても安全である」という見解を発表した際には、その後の一週間で三万三千人も中国人留学生がグリーンカードもしくは市民権の申請に押し寄せたのである。それ以前から、帰国留学生が専門に合った高度専門職につかせてもらえないなどというトラブルは頻出しており、米国への留学が一方通行の「移民」になる割合には歯止めがからなくなっていく。イー・ユニ・リー自身もまさにその一例といえよう。リーは一〇歳で国を出たいと思ったが、それを両親にはひた隠しにして、まずは化学専攻というキャリアを積むことにしたという。一六歳で『チャタレイ夫人の恋人』をよくわからぬまま英語で読んだという彼女にとって、英語と英語文学は、自分の国／家への反抗の手段であったのだ。彼女の自述を言葉通りに受け止めてよいかどうかはともかく、かなり早くから彼女が誰にも言わずに出国の意思を固めていたのは間違いないだろう。とすれば、天安門事件後に無意味な軍事

訓練を経て北京大学に入学した時、彼女はすでに半分越境した存在であったと言っているかもしれない。その姿は、「市場の愛」の三三が大学卒業後に「アメリカに行くようになったらいつ何時でも生徒を捨てつもりで」ハミングしつつ微笑んでいたという描写を連想させる。この微笑は、外部者として内部のものに向けられた余裕の微笑である。

実際、恋人に裏切られた後の三三はそれまで見せていた『サウンド・オブ・ミュージック』——一家全員が無事にナスから逃れる物語——の上映を止め、『カサブランカ』——愛する女性と彼女の政治的パートナーを新天地アメリカに送り出すため、自分を犠牲にする男の物語——を繰り返して流すようになったのだ。『カサブランカ』放映に込められたのは、中国に置き去りにされた自分を、自己犠牲の美しい物語に置き換えようとする三三の自己防衛だったと言えるだろう。更に忘れてはいけないのは、一九八九年の民主化運動が三三の運命を変えた事件ではあるものの、三三自身は「広場に行かなかった数少ない学生」であり、祖国の民主化という大きな潮流に際して、彼女は最初から当事者になろうとしなかつたということである。もちろん二〇〇五年に米国で書かれた小説における三三の選択は、一九五七年に北京で書かれた「紅豆」における江玫の選択と同じく、歴史的な結果を知っている作者による操作によるものには違いない。それにしても、「紅豆」で描か

れたような祖国中国への熱誠とアイデンティティが、四〇年とたたないうちに姿を消してしまっているのは注目値する。アメリカという国は、はからずも登場人物の、祖国中国への感情を映し出す鏡として作用していると言えるだろう。

### おわりに——決断の後

一九五二年、張愛玲は自分が一時代を築いた街、上海を永遠に去った。抗日戦の後にはいくつかの「人民小説」を書き、五二年というかなり遅い段階まで上海に残っていた彼女は、いつときは中国に残る道を模索したのだが、最終的には離れざるを得なかったのである。幼い頃から英語を勉強した張愛玲はもともとロンドン大学進学を希望していたし、香港大学留学から帰国した後は英文エッセイも発表していた。その彼女にして、上海よりも長い時間を過ごした米国を舞台にした作品はほとんど見当たらない。生前未発表だった中編「同学少年都不賤」は米国に渡った女学校同窓生のその後を描く貴重な一編だが、紙幅のほとんどは上海時代の回顧に費やされ、逆に視点人物であるヒロインの米国での生活がいかに空虚なものであるかを際立たせている。渡米後の張愛玲は大量の翻訳と映画脚本執筆のほか、旧作のリライトと自伝的小説（小説形式をとった自



伝、と言ったほうがいいかもしれない)に没頭していた。

その多くは英語で書かれており、彼女自身はバイリンガルな創作家だったが、その視点は、たとえば彼女が初期の目標に掲げていた林語堂のように英語世界に入り込むことなく、自分が後に残してきた民国期の中国にとどまりつづけているようだ。やはり英語で自伝 *Ancient Melodies* を刊行した凌叔華と同じく、張愛玲は渡米後も「越境し終わらなかった作家」と呼べるかもしれない。そして彼女の創作上の越境がいに終わらなかったことは、彼女の英文小説が英語圏では思うように受け入れられなかったことと関連しているだろう。

短編小説の成功後、イーユン・リーは二編の長編小説を発表している。最新作の『孤独よりも優しく』<sup>20</sup>は天安門事件後の北京で起こった毒殺未遂をテーマとしたものだ。清華大学で実際に起こった事件にインスピレーションを得たものらしいが、事件の舞台は作者の母校北京大学に移されている。投毒という「事件」そのものより、天安門事件後の北京の息苦しさ<sup>21</sup>と、「事件」発生の二〇年後、アメリカや北京に暮らす関係者たちの感じている孤独に描写の重点が置かれているのだが、渡米した人物にしても、北京に残った人物にしても、どちらも中国の現在について「当事者ではない」という距離を持つ。もちろんこの「距離」は、作者が創作言語に英語を選んでいる——彼女は中国語

では書かない、英語モノリンガルの創作家である——ことにも起因しているだろうが、張愛玲の英文小説と比べれば、明らかに中国社会を描写する視点も当事者のそれではないことに気づく。いわばリーは「すでに越境を終えた」作家なのだ。彼女が描く中国がアメリカで広大な読者を獲得していることは、この「越境を終えた」姿勢と無縁ではあるまい。これが「英語圏への迎合」なのか、「世界文学のスタンダード」なのかについては、中国大陸のほかに台湾や香港をはじめとする多様な華語世界を参照することが必要だろう。

二一世紀に入っても、中国人学生のアメリカ留学熱は止むところを知らない。「グローバル化」という旗印のもとで中国本土の「アメリカ化」が進むとき、「祖国中国」はどのような感情のもとに描かれることになるだろうか。当代文学におけるアメリカのイメージを考えることは、中国イメージを考えるための手がかりとなるだろう。

〔付記〕 本論は、科学研究費B25284065（研究代表者 武田雅哉）の成果の一部である。

## 注

（一） 本論では『中国当代作家選集叢書・宗璞』（北京…人

民文学出版社、一九九一年）をテキストとして用いた。以下、ページ数は該当書のものを表す。

- <2> “Love in the Marketplace,” *A Thousand Years of Good Prayers*, London: HarperCollins Publishers, 2005. なお、邦訳に篠森ゆりこ訳「市場の約束」『十年の祈り』（新潮社、二〇〇七年）があるが、本論文での引用は濱田が翻訳した。
- <3> 濱田麻矢「十七年」、文学の愛情と革命——宗璞『紅豆』をめぐること（『吉田富夫先生退休記念中国学論集』汲古書院、二〇〇八年）。あらずじなどはこの前論を繰り返させていた。以下、ページ数は該当書のものを表す。
- <4> 斉虹の造型については注<2>の拙論を参照。
- <5> John Israel, *Lianlu: A Chinese University in War and Revolution*, Stanford University Press, 1998, p. 135.
- <6> 宗璞がキーツなどの英文学に親しんでいたことについては、注<2>の拙論を参照。
- <7> 注<2>の拙論参照。
- <8> 潘人木『蓮漪表妹』台北：爾雅出版社、二〇〇一年、二九三頁。
- <9> 固有名詞の漢字表記は、日本語訳者篠森ゆりこ氏が作者イーユン・リーに確認したものを採用している。
- <10> Michel Faber, “The Guardian,” 7/Jan/2006. <http://gu.com/p/xexp/sbl>
- <11> Rodney Welch, “The Washingtonpost,” 27/Nov/2005 <http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2005/11/23/AR2005112302098.html>
- <12> イーユン・リーには同性愛や同性の絆を描いた作品が少なくない。 *A Thousand Years of Good Prayers* 収録の短編では “The Princess of Nebraska” と “Son” にゲイが描かれている。
- <13> Stacey Bielek, “Patriots” or “Traitors”? *A History of American-educated Chinese Students*, New York: M. E. Sharpe, pp. 350–352.
- <14> 同注<12>、三五五頁。
- <15> Yiyun Li: a life in writing, interview by Susanna Rustin, *the guardian*, 13/Apr/2012. <http://gu.com/p/36nky/sbl>
- <16> このときの体験をもとにした短編小説には、深夜に軍のキャンプのヘッドでロレンスを読みふける少女が登場する。 Yiyun Li, “Kindness,” *Gold Boy, Emerald Girl*, London: Fourth Estate, 2010.
- <17> 河本美紀「一九五〇年前後の上海文芸界と張愛玲」『野草』八一号、二〇〇八年。
- <18> 拙論「女学生だったわたし——張愛玲『同学少年都不賤』における回想の叙事」『日本中国学会報』六四、二〇一二年参照。
- <19> Su Hua Ling Chen, *Ancient Melodies*, London, Hogarth Press, 1953.
- <20> *Kinder than Solitude*, Random House, 2015.
- <21> Yiyun Li: “This is my generation. It’s what we experienced,” *The Guardian*, 30/Mar/ 2014.